

# なぜ獣医師が学校飼育動物に関わらなければならないか？

杉本寿彦

## 1 なぜ学校飼育か？

小学校教育では、生活科、理科、道徳の学習において、「生命の大切さを」を教えるために、文部科学省も学校での動物の飼育を奨励していることは皆様もご存じの通りです。また、子供の心の成長を助け、他人への思いやりの心を育てるために、幼少の頃に動物とふれあうことが非常に有効であることは、最近の研究においても実証されていますし、2004年の日小獣年次学会（愛知）の際に行った、愛知県内の小学校を対象に行ったアンケートでも、ほとんどの教諭が動物の飼育は子供に良い影響を与えると答えています。

しかし核家族化、集合住宅など子供達を取り巻く環境は、家庭での動物の飼育が難しい、あるいは不可能な状況が多くなり、学校でしか動物とふれあう機会を持たない子供も増えてきています。

最近の子殺し、子供に対する虐待事件の多発は「暖かい血の通った動物を抱いたのは我が子が初めて」と言うような親がめずらしくない現代では必然的に起きうることなのかもしれません。

これらの事を考えても、学校で動物を飼育する意義は大きいと考えます。

## 2 学校飼育の現状

学校教育の現場では、教諭達は多くの仕事に追われ、動物飼育は一番後回しにされ、飼育係も新任の教諭が押しつけられることが多いようです。

動物に対して知識不足、認識不足な学校、教諭による飼育は、「子ウサギが増えすぎて困り、生き埋めにした」「病気で死んでいくのを見せるのも教育と言って、治療もせず放置している」など、目を覆いたくなるような惨状も一部では起きていることも事実です。

そして獣医師の間からこのような飼育は教育どころか逆効果だ、学校で安易に動物を飼育すべきではないという声も聞かれます。

一方で、最近では全国的な傾向として、動物飼育の教育的効果を認め、学校をあげて学年飼育に取り組んだり、行政、獣医師会と連携し、動物介在教育を実践する学校も増えてつありま

す。

そして、そのように良い効果を上げている学校、地域は例外なく獣医師、獣医師会との協力体制が出来ています。

## 3 獣医師が学校飼育に関わることの意義

学校にとって動物の飼育は、大きな負担であり、多くの場合、厄介者お荷物扱いをされていると言う現状があります。これは動物に対する知識不足そして問題が起きた場合その解決のための相談相手を持たないことがその一因となっています。

そのような問題を解決し、本来の学校飼育のあり方、意義を実践できるように導くことが出来るのは、動物に関する唯一の国家資格を有する獣医師であり、またその専門知識を持ってその職にあたるのは我々獣医師の社会的責任であると考えます。

また、公的な場、しかも教育の現場で動物が飼養されているのに、今までその健康管理に獣医師が関わってこなかったことは、我々の怠慢であり、世間から見れば無責任の誹りさえ受けかねない様な事柄が見過ごされてきたことは、獣医師の社会的認知度の低さによるものなのではないでしょうか。

## 4 獣医師と学校の関係

＊学校飼育動物に対する獣医師の意識、獣医師に対する学校の意識

我々が日々の診療の中で、学校で飼育されているウサギなどを診療する機会があり、好むと好まざるとに関わらず、学校飼育動物と関わった事のある獣医師は多いことと思います。

そして時には（多くの場合？）飼育に対する学校側の知識のなさや、治療に対する消極的な態度（多くの場合、酷い状態で連れてこられます）などに腹立たしい思いをし、学校の飼育のしかたを非難する事もあるのではないのでしょうか。

そして、私たちがそのことを非難すれば、学校は面倒なことを避けようと獣医師にかかることを嫌い、お互いの信頼関係を築くことは難しくなり、その結果学校での動物飼育の状況はさらに悪化し、結果的には先程書いたように、学校で動物を飼うことを止めろと言う事態に至り



ます。

しかし、文科省の方針に従い、動物を置いている学校、校長から任命され知識のないまま飼育をまかされ困惑する担当教諭、こうした事情を考えず、普段我々が接するクライアントと同レベルで彼らに対すること自体が間違いであり、我々は学校側のそうした事情を知った上で”学校の良き理解者”として学校動物の治療に当たる必要があります。

学校側が獣医師を良き理解者、良き相談相手と認識することで、正常な関係を保ち、学校の動物飼育を改善することに繋がるのです。

獣医師も”学校の先生は動物の飼育が本業”ではなく、日々雑多な仕事に追われる毎日を送っていることに理解を示す必要があります。

学校の先生の多くは本音を言えば、動物どころじゃないそんなことに関わってる時間

なんて無い！！と言う所ではないかと思えます。

しかしそれは学校での動物飼育が大変で面倒なことであるからであり、その負担が軽減され、”飼育が楽しい”と思える環境が出来るようになれば、学校も変わります。

学校飼育動物の問題は動物に関わる専門家である我々が、子供達から動物を取り上げることで解決するのではなく、より良い飼育が出来るように手助けをすることで責任を果たさなければならないと思えます。

「しかし、忘れてはならないのは、獣医師は学校に飼育を監視しに行くのでは無く、飼育に関わる学校の悩みをその事情を考えながら一緒に悩み、手伝うのだと言う事です。子どもの心の成長のために、獣医師という立場から手伝うので、一方的に指導しに行くのではないのです。」(鉤括弧内、”学校飼育動物を考えるページ”より引用)

## 5 愛知県での現状と委員会としての今後の活動 学校飼育動物への獣医師（獣医師会）による

支援体制の全国的な傾向として、今の学校飼育の現状を何とかしなければならぬと、行政と連携し、学校飼育の支援活動を活発に行う地域が年々増えています。

愛知県は今まで、豊川などごく一部の地域で有志の獣医師により活動が行われていたケースはあるものの、県全体から見れば、学校飼育動物の対策においては”発展途上国”と言わざるおえない状態でした。

しかし昨年、小牧市教育委員会と小牧市の獣医師が連携し、市内の小学校において、ふれあい教室を行うなど、積極的な活動を展開し、また稲沢市の獣医師会も教育委員会との話し合いを持ち、活動を始めるなど、ここに来て急速に学校動物飼育支援への動きが活発になってきました。

それを受け、学校飼育動物飼育支援委員会でも、参考資料として行政との連携を結んでいる他府県の契約資料、あるいはふれあい教室を行う際のパワーポイントファイル、紙芝居、などのアイテム等、会員の利用できる貸し出し用資料を揃えると共に、各地域の活動が円滑に行われるよう支援すること、講演会の開催など、知識と情報の提供を図ることなどを活動の核とし、獣医師がどの地域においても同レベルで活動が出来るようなマニュアルを作成することが必要であると考えます。

また、県内の活動の情報を細大漏らさず集積し、県教委に毎年報告することで、学校獣医師制度の確立に向けて実績を積み重ねて行きたいと思っています。

最後に資料として、中川美穂子先生の主宰するホームページ

”学校飼育動物を考えるページ”  
<http://www.vets.ne.jp/~school/pets/> を参考に致しました。是非一度ご参照下さい。

(愛知県獣医師会)

